

陸橋からの眺め  
中村昌義



陸橋からの眺め 中村昌義



# 陸橋からの眺め

© 1979

昭和五十四年七月十五日 初版印刷  
昭和五十四年七月二十日 初版発行

著 者 中村昌義

発行者 清水 勝

発行所 株式会社 河出書房新社

東京都新宿区住吉町九五

TEL 営業 〇三―三五五―五三二一  
編集 〇三―三五五―五三二一  
振替口座 (東京) 〇―一〇八〇二

印刷 三松堂印刷株式会社  
製本 大口製本印刷株式会社

落丁・乱丁本はお取替えいたします

目

次



出立の冬

7

淵の声

87

陸橋からの眺め

173

装  
幀  
—  
司  
修

# 陸橋からの眺め



# 出立の冬



半月に一度ずつ福岡に出て来るたびに、私は街の様子が少しずつ変わってゆくのに気がついた。もちろん戦火の名残など何処を探しても見当たらない。道筋に新しい洒落た洋品店や喫茶店ができていたり、商店街のアーケードが模様替になっているのを見ると、なんだか自分ひとり取り残されたような気分になるのだった。

その日も失業保険の金を受け取ると、まっすぐ帰りかかった。元の勤め先の県庁にも寄る気になれなかった。冬らしい陽がきらきらと射して、福岡の駅前広場に出るとわずかな風が頬に冷たかった。西鉄の駅が岩田屋デパートから突き出した恰好になっている。駅の構内は数段の階段で路面よりすこし高くなっている。

この階段の横手で、母と蜜柑を売ったことがあった。父に戦犯として禁固十五年の刑が確定した、戦後二年と経っていない頃だった。いま父は、巢鴨プリズンに収監され、仮釈放の噂も出はじめているが、その頃はまだジャワにあったチピナン戦犯刑務所にいた。

いたるところ焼跡の残骸だらけで、この広場にも戦後独得の熱気が立ちこめていた。人波に逆らうようにして物を売っていた母の姿が目に残っている。一家中が恐怖に追いつめられるような

氣持で夢中だった。初めてそこに立った夕方、通りがかりの中年の男が母に声をかけた。こんな商売をあなただ方がやってゆけるわけがない、力になりましようと言って名刺をくれた。見ていられないようなぎこちなさが私たちの様子にあったのだらう。

それから間もなく、上の妹がここに屋台を出して落花生を炒りながら売った。女学校を三年の中途でやめてそう日が経っていなかった。私は学校がひけると手伝いに来たが、妹はいつも七輪を前にして顔を伏せていた。私も十六になったかどうかの頃だった。

屋台は折りたたみ式の貧弱なもので、このあたり一帯を仕切っていた露店商の親方から借りたものだった。しょば代として三百円払った記憶があるが、それが一月分だったかもっと短い期間のものだったか忘れてしまった。というのも、半月と続かなかったからだ。収入といえるほどのものにはならなかったし、まだ子どもだった妹には無理な商売だった。

しょば代を集めに来る男に屋台を返してから、母は私を連れて露店商の組合事務所に出かけた。商売を止める時には保証金を返してくれる約束になっていたからだ。

渡辺通りの市電の交差点からすこし裏道に入って、事務所が見える角まで来ると、母は立止まってしまった。しばらくぐずぐずしていたが、私に、行ってくれる？ と頼んだ。私は勇気を振るって事務所に入った。一度挨拶したことのある親方が、粗末な椅子に横向きにかけていた。事務所の中は乱雑に散らかり、隅の机で若い男がなにかしていた。私が保証金のことを切り出すと、とたんに隅にいた男が陰悪な声を出して立上があった。殴られるかも知れないとおもった。だが男は肩を怒らせて近づいただけでなにもしなかった。親方は私の顔を見ていたが、いま金はなかと

言った。じゃあ、預り証をくださいと頼むと親方はしばらく考えているふうだったが、小さな紙切れに、仮領収 三万円 とだけ鉛筆で書いた。おそろしく下手な字で、署名も日付もなかった。その三万円は母の銀狐の襟巻や着物、熊の毛皮の敷物など、家に残っていた目ぼしいものをほとんど売って作った金だった。受け取ろうとしたとき酒くさい息が顔にかかった。肥ってものうそんな物腰だったが男の肩や腰に容赦ないものが感じられ、紙切れを渡しながらの一瞥になんとも言えない妻味があった。事務所を出ると母の姿が見えなかった。道角まで行くと、ショールの前を両手でつかんで電柱の陰に身を隠すようにして母が立っていた。

職安からの帰りはいつものことだが気が減入った。受け取った金は千三百円ほどのもので、その少なさもあったが、係の職員に職探しをしているふりをした時の気持からなかなか脱け出せないでいるのだった。巢鴨の父から促されて、この夏、私は大学受験の勉強にかかるために勤めを辞めていた。係の職員には、父の出所の話が駄目になったので、また仕事につかねばならないと答えていた。言訳をしているうちに、まるで本物の失業者になってしまったような気がしてくるのだった。福岡から電車に乗ってから沈んだ気持が続いていた。そろそろ失業保険が打ち切られる時期が近づいていたが、この帰り途の気持がいつも苦痛で、むしろそれが待遠しかった。

二日市まで来ると太宰府行きの電車に乗り換えて、発車までの時間を待った。二輛だけの古い木造の電車で、途中に駅員がいない五条駅がひとつあるだけの短い単線区間を、この二輛が往たり来たりしていた。動いている時間より終点でのんびり止まっている方が長い。午後の人少

ない時刻で、坐って発車を待っている男たちは煙草をふかしていた。この線だけはどのようなわけか車内で喫煙しても咎められることがない。

床板に十センチ角ほどのブリキが張ってあり、まん中のところが丸くへこんでいた。戦争末期にグラマンの機銃弾が撃ち抜いた痕だった。ぼんやり足許を見ていると、裾を括った私のズボンが目に入った。沈んだ気持のせいか気になった。紺地に細い緑の縞が入った父のお古だったが、バンドのあたりはひどくだぶだぶしているくせに、私には丈が足りなかった。裾の折返しを解いて全部のばすとどうやら穿ける長さになったものの、それでは恰好がつかないので裾に紐を入れて括ってみた。まるでもんべとランニングパンツの合の子だった。上着は、古着屋で手に入れた海軍士官の制服を、手首の蛇腹の飾帯だけとって着ていた。最近では、何処に行くにもこの恰好で歩いていた。めったに髭もあたらず、髪ものびてしまった。この前、職安に行った帰りに県庁に寄ると、以前の同僚たちが呆れた顔をした。つくづく眺めると人が笑うのも尤もだった。

いま降りて来た向う側のホームに電車が着くたびに、わずかな人がこちらに歩いて来る。近くの裸の木立で鶉らしい鳥が高い声で鳴いている。風呂敷包みから英作文の参考書を取り出して、例題を暗誦しにかかった。いつもならすっと入ってゆけるのに、どういふわけか身が入らない。揺れるようなメロディーが軀のどこかで鳴った。小さな江利チエミがうたっているテネシーワルツだった。何処に行ってもこの歌が聞えてきた。口ずさむと歌のなかにこの一年がつまっているような気がした。

足許の陽のなかに人影が動いた。顔をあげると、着物姿の大柄なゆき江が入って来た。丸窓と

いう飲食店の女中をしていて、客もとる女だった。私を見てにっと笑うと横に坐った。何処へ行ったと聞くと、二日市の保健所に検診に行つて来たところだと答えた。ためらう素振りもない。袂に手を引つこめ、指先で安物のショールの端をまるめるように握っている。化粧を落した肌がかさかさしていかにも寒そうに見える。

「しばらく顔を見せんね、勉強が忙しかと?」

「うん、あと二カ月しかなかけんね」

「たまには息抜きせんといかんよ」

「適当にやつとるよ」

「今夜んでん、飲みに来んね」

「そうやな、行つてもよかばつて」

「じゃ、天満宮のお守りもろうてきてあげようか。勉強の神様やから」

「お宮のは、よか。毎日、散歩しとるから」

息苦しいほど顔を近づけて話すので、私はそつと尻をずらして間をあけた。やがて電車が動き出した。方向が變つて後ろから陽が射しかかり暖かかった。

彼女は、金は全部、店のおとうさんに天草の実家に送つてもらつていると話したことがあつた。自分は小遣いらしい小遣いも持たず、煙草錢にも不自由している様子だった。どんなわけがあつて仕送りしなければならぬのかとたずねると、急にぼんやりした顔になつて教えてくれなかつた。考えることを止めてしまったような顔つきになつたゆき江を見ると、悪いことを聞いた

とおもった。彼女は自分の生まれた家に縛られて身動きならぬのかも知れなかった。——私にしても、巢鴨の父から進学をすすめられるまでは、幼い弟妹を放り出して自分のために生きている姿など想像しにくかったのだ。

私は、来年の一月半ばに上京を予定していた。日が近づくにつれ、そんなことがあり得ないような気持ちになって落着かなかった。それと同時に、その日の細ごましたことが想像されて、不安と期待とで胸が苦しくなるのだった。

戦争末期、東京から父の郷里であるこの太宰府に疎開してから八年が経ってしまった。戦争が終った翌年の春、祖母が亡くなると、材木屋の家業を継いだ義理の叔父は私たち一家に冷淡になった。収入が絶えて困り果てた母が相談にゆくと、路頭に迷っているのなら考えぬでもないと言われた。母は家に帰って来ると私を相手に叔父の薄情な言いぐさを怒り、やがては父まで悪く言った。

父が帰らぬとわかってからは、母は、さまざまな闇商売に手を出した後で保険の外交を始めた。そのどれをとっても、母自身でさえ思いもよらなかった類いの仕事だった。追いつめられるような母の気持はわかつているつもりでいながら、夜遅く疲れた荒い表情で帰って来る母を見るのはたまらない気持だった。酒くさい息をして帰って来たり、沈んだ顔をして煙草をすっているのを見るのは辛かった。そして無我夢中で働いているうちに、母はやがてあざといほどの行動力や思い切った金銭の扱い方を身につけていった。

二年ほど前から母は、家を離れて仕事をするようになっていた。いまは熊本と鹿児島県境に